

## 「あるメディアの墓碑銘——『ライフ』の終焉」（『美術手帖』1973年5月）

- ・『ライフ』の休刊、69年『サタデイ・イブニング・ポスト』の廃刊、71年『ルック』の廃刊を一連出来事として認める必要性。
- ・多木はライフの休刊を、メディアをめぐる社会的・歴史的規模の変容から見る。彼が重視するのは主にテレビである。
- ・『ライフ』基本情報、創刊者ヘンリー・ルース、一時発行部数850万部、読者数3000万。グローバルな印刷資本の連帶、高速精密な診察技術、大規模な広告収入と大規模な市場。多木はこうした追及に、将来的な電子化という必然性を指摘している。
- ・ライフの休刊の実質的要因の一つとして「郵便料の値上げ」
- ・「『ライフ』は私たちのテレビジョンだった」という読者の声があるという。
- ・ライフに、資本主義的なシステムを、多木は指摘する。ここにおいて、雑誌というメディアの大衆志向とそのイデオロギー的問題点を暴き出そうとする。
- ・ライフが自らの存在維持のためにそのメディア特性から政治性の強調に戦略の重点を置いたことで、その存在意義はむしろ低下していった一方で、その受容者である大衆の構造の変動もまたその廃刊の要因として作動していた。
- ・『ライフ』のアメリカ性——その政治的・社会的力学。つまり30年代の大恐慌が生み出した、「記録」をめぐる、政治的・美学的イデオロギーとそれを指示する大衆の欲望を端緒とする『ライフ』。それらがスペイン戦争、朝鮮戦争とそれらが一致していた状況からベトナム戦争に突入するに至り、両者の共犯関係が破綻することで、『ライフ』の基盤が揺らいだ。このことは、それまでのあいだ『ライフ』がいかに「記録・報道」という行為のアメリカ性を見ずに済ましてきたかを暴き立てるのである。
- ・また『ライフ』のシステム的表象——撮影に先立つアイデアや撮影後の編集などを通して、ルースが賞賛する「見る」というナイーブな行為はつねに「見せる」というスペクタクルな行為によって変容させられている。
- ・「『ライフ』はあらゆる記録をモニメント化しながら、自らが新しいモニメント、すなわちメディアであることをたしかめてきたのである」（391）
- ・多木は、エンツェルスペルガーを参照しながら、エレクトロニクス・メディア（デジタル・メディア）に、これまでのメディアとは異なる可能性——「大衆の可動化」を見る。
- ・「…エレクトロニクス・メディアがつくりだす流動的で相互的な世界の中で、写真はこれまでとちがったありようを示すに違いない。それはエレクトロニクス・メディアの概念が基盤になって、写真の概念は再構成されるようになることである。…写真家は初期の『ライフ』のように、写真の意味と写真家が直接に結びつき、生き生きと写真を撮ることができなくなったことはなぜかと自問する。写真家は手にしているカメラを見ながら、それが事物のあいだのヒエラルキーをこわし、人間の側の特別な専門化をもこわすようなものになってきてしまったのはなぜかと考える。実際、かれにはカメラの意味、その可能性が（単にメカニス

ムの問題ではなく）変わってしまったように見える。支配的なメディア、社会や人間の像を浮かび上がらせるメディアが変わってしまったからである。写真は過渡的存在であろうかという不安な問い合わせ、職業化し、表現者である写真家の心底に去来している。」（395）